



先日、月刊「日本教育」1月号（発行：公益社団法人 日本教育会）を読んでいて
言葉について改めて考えさせられました ので紹介します。

ことば新事情「『助詞』は意思を伝える信号」

NHK放送研修センター 日本語センター専門委員 加藤 昌男 著より 一部抜粋

- 単語だけで通じるのは仲間内だけ -

児童が「先生、えんぴつ」と話しかけてきたとき、どう応じますか。その子は鉛筆を忘れた、あるいは芯が折れてしまったと訴えかけたいのかもしれませんが、新しい鉛筆を買ってもらったことを自慢したいのかもしれませんが。

こんな場合、先生は「えんぴつ…」の後、子どもの様子を見ながら、次のことばが出てくるまでの数秒を待つことが大事です。ここで先生が「忘れたの?」「折れたの?」と助け船を出してしまうと、子どもは単語だけで事が足りると思ってしまう。待っている間、子どもは言葉を一生懸命探します。その結果、「えんぴつを…や」「えんぴつが…」という助詞を使った話し方になるでしょう。

単語の羅列だけで通じるのは、仲間内の会話です。それは相手が足りない言葉を補って解釈してくれるからです。先生が物分かりのよいお喋り相手になってしまっただけでは子どもの言葉は育ちません。話し手の意思を表す助詞が出てくるまで先生が待つこと。それが言葉を育てる上では大事なことです。

- 「私がやる」「私もやる」「私はやる」 -

学級委員や実行委員を選ぶ場面です。「ぼくがやる」と積極的に立候補する生徒がいれば、ことはスムーズに進んででしょう。「私もやりたい」という希望者が多ければ何らかの方法で委員を選ぶことになるでしょう。周りの状況を見ながらできれば今回はパスしたいという生徒もいるでしょう。他人の態度はどうだろうと「私はやる」という生徒もいるでしょう。

「が」や「も」や「は」は、一人ひとりの意思を示す信号です。「助詞」の役割を考えましょうと取り立てて構えなくても、こうした場面は学校生活の中でいくらかでも見つけることができます。…（略）…助詞の使い方をどれだけ意識しているのでしょうか。

多くの言葉を身につける小学生という大切な時だからこそ、コミュニケーションがしっかりととれるように育ててあげたいと改めて考えました。上記のような「助詞」だけでなく、「えっ?その言葉は…」と、聴いていて心が痛くなることが時折あります。子供たちへかける言葉や聴かせる言葉、子供たちが聴くであろう言葉の大切さを考えました。さらに、子供たちの話は目を見て、途中で遮らず最後までしっかり聴いてあげたいと思っています。(白井)

学校を代表して質問をしてきました 小美玉市子ども議会

(12月26日；市議会議場にて開催)



本校を代表して、6年生松野さんが参加をし、市内全小学校代表児童の1番目の質問者として、質問席に立ちました。そこで、通学路である国道355号線の歩道の狭さや危険な場面等の現状を伝え、ゆとりのある広さの歩道の整備などについて堂々とした姿で質問をしました。それについて、市の担当者から答弁と皆さんも引き続き交通ルールを守って登下校してほしいとの話がありました。

この小美玉市子ども議会については、1月8日の茨城新聞に記事が掲載されました。

1/19 読み聞かせ 「おはなシテルテル」 「リコーダーの会ピコット」



(文：ひまわりをうえた8人のお母さんと葉牡丹、絵：松成真理子 岩崎書店) ひまわりを植えたのは、東日本大震災で大切な我が子を亡くした、大川小学校の保護者の方です。ひまわりの成長と我が子の姿を重ねて…。

本校の今年度の教育キーワードは、「笑顔で登校 笑顔で学び 笑顔で帰る あたたかい学校」です。先週は、予告なしの避難訓練を休み時間に行いました。遊んでいた子ども身がかがめ、放送を聴く姿がありました。一人のいのちもなくすことなく、笑顔で帰ることができるよう、いのちの大切さ、自分で守ることの大切さを、引き続き伝えていきます。

